

光村ポケット

中学校 美術

美術館と連携した 鑑賞の授業①

実践者：やまむら あ ゆ み 山村亜祐美先生（久慈市立久慈中学校）

協力者：さ さ き の り お 佐々木倫生先生（岩手県立美術館）



今回の「光村ポケット」では、
岩手県立美術館から作品資料や指導案の提供を受け、
同館と連携して行われた鑑賞の授業の様子を紹介します。

題材名 「赤い目の自画像」を
描いたときの気持ちとは？

（1年／全1時間／絵画や彫刻など／鑑賞）



光村図書



LINE公式アカウント友だち募集中！
授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



【教授用資料】 本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

「赤い目の自画像」を描いたときの気持ちとは？

実践者：山村亜祐美先生（久慈市立久慈中学校） 協力者：佐々木倫生先生（岩手県立美術館）

題材のねらい

岩手県立美術館と協力して行われた授業です。「見る力」を育てる鑑賞授業を3回構成で実施し、本授業はその第3時にあたります。萬鉄五郎の「赤い目の自画像」を題材に、対話による鑑賞を行います。言語活動と生成AIの活用を組み合わせることで、表現力と理解力を育てるとともに、他者との対話・共有によって協働的に学ぶことをねらいとしました。

準備物

- 教師 教科書、ワークシート、作品を映すモニターなど
- 生徒 教科書、タブレット端末

活動の流れ 1年／全1時間／絵や彫刻など／B鑑賞（1）ア（ア）イ（ア）（イ）

時	学習活動	指導の手だて
1	●「点描風の自画像」「雲のある自画像」を見て、第一印象を共有する。 ●作品「赤い目の自画像」を見つめ、第一印象を書きとめる。 ●作品から感じ取ったことや疑問を、クラス全体で共有する。 ●萬鉄五郎と時代背景について知る。 ●生成AIで「赤い目の自画像」の左目と右目に近いイメージを作成する。 ●生成した画像とプロンプトを全体で共有する。 ●今日の学習について振り返り、ワークシートに記入する。	●作品を見つめる際には、描かれている人物がどんな性格なのか意識させる。 ●作品から多くの疑問が生まれるよう発表を促す。 ●画家の作風の変化や、時代の価値観の変化について解説し、見方をさらに広げる。 ●イメージに近づくために、ペアでプロンプトを考えさせる。 ●成功した例だけでなく、印象と生成した画像にずれが生じた例も共有する。

アイデア1 「疑問」を挙げさせる

はじめに萬の作品「点描風の自画像」と「雲のある自画像」を提示し、生徒に自由に印象を語らせました。「優しそう」「目が怖い」といった率直な感想を受け止めつつ、どこからそう感じたのかと問い返します。本授業の題材である「赤い目の自画像」については、まずは見えたものを言葉にするよう促しました。最初に「赤い、黒い」「複雑な感じ」と、色についての発言がありました。さらに、顔と目が見えるという発言から、「服がギザギザに描いてある」など、特徴的な表現にも気づき始めました。ここでさらに、「この絵を見て不思議に思ったところはない？」と疑問に思うことを尋ねます。生徒からは「目が左右対称ではない」、同時期に描かれた3点の自画像が「3つとも全然違う」などの疑問が挙がりました。疑問が作品理解の入り口となり、能動的な鑑賞へと変化しました。

作品から生まれる問いを共有して、考えをさらに広げていく



アイデア2 鑑賞に必要な作品の情報を与える

意味のある鑑賞とするために、疑問が出始めたところで、時代背景について触れました。萬の写実的な静物画を提示すると、「うまい」「本物みたい」と驚きの声があがります。当時の美術界では写真のような絵が評価されました。いっぽうで、個人の自由な表現の探求が始まった時代でもあります。こうした時代背景を踏まえて、作者が自画像にどのような気持ちをこめたのか、さらに想像を膨らませました。授業の最後には、萬はあえてこのような描き方をすることで、時代に反抗したのではないかという意見が出ました。



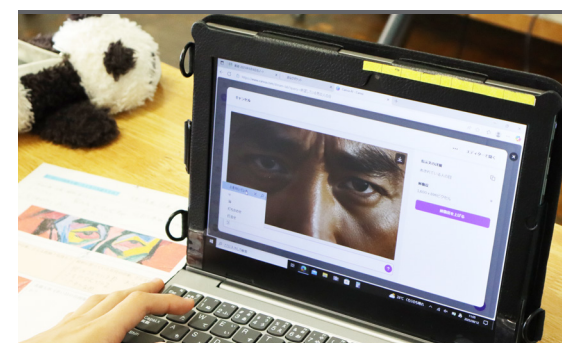
赤い目の自画像 油彩、キャンヴァス
60.7 × 45.5cm 1912-13年 岩手県立美術館蔵
萬鉄五郎 [1885 ~ 1927 岩手県出身]

TIPS 萬鉄五郎「赤い目の自画像」について

萬は1907年に東京美術学校（現在の東京芸術大学）に入学し、1914年に故郷へ戻ると絵画制作に専念した。フォーヴィスムや未来派などの前衛的な絵画思想に呼应して独自の表現を模索した。本作は激しい色彩の対比と鋭角的な色面で構成され、キュビズムや表現主義、未来派の影響を受けたことが指摘される。アカデミックな手法が主流であった当時の日本美術界において、こうした萬の試みは賛否両論を呼んだ。

アイデア3 生成AIを活用する

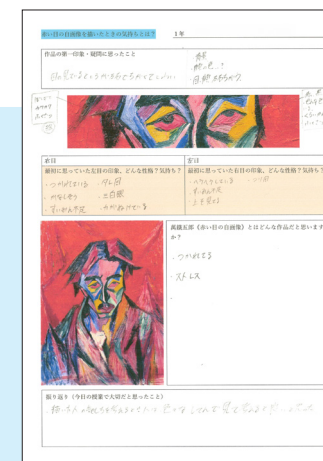
授業後半では、生成AIを用いた活動を行います。生徒は作品「赤い目の自画像」の右目と左目それぞれに注目し、それぞれの目がどのような性格や感情を表しているかを言葉で表し、その言葉をプロンプトとして入力しました。例として「怒り」と入力して生成された画像と作品を比較して、どう違うのかを議論しました。この活動の目的は正解を探すことではなく、言葉とイメージの関係を試行錯誤することで、作品と出力の「ずれ」が学びを深めていきます。「垂れ下がっている」「歌舞伎のよう（焦点が合っていない）」など、多様な表現が試されました。また、眉間や頬、姿勢といった目以外の要素にも自然に注意が移りました。最後にこれらの活動を踏まえて、萬が何を描こうとしたのか考えました。



プロンプトを入力し、生成AIでイメージ画像を出力している様子。

TIPS ワークシートについて

授業の流れに沿って、作品の第一印象や疑問に思ったことをメモしたり、どのような作品であるか考えて書いたりします。作品の目の表現にフォーカスして鑑賞する欄も設けました。この欄に、生成AIに入力するプロンプトも書きます。振り返りの欄では、今日の授業で大切だと思ったことを書くように促しています。絵を鑑賞するにはポイント（視点）があること、ポイントは複数あることなど、今後の鑑賞に活かすことのできる気づきが多く見られました。



授業を終えて

実践者：山村亜祐美先生（久慈市立久慈中学校）

本日の授業では、たくさんの疑問を生徒から引き出したいと考えていました。作者や時代背景について生徒に情報を与えるタイミングについても、生徒の疑問に答える形で、つまり対話の中で提示するよう意識しました。ポイントを絞って鑑賞するために、着目すべき項目を示したカード（「色」「形」「性格」など）も用意しました。生成 AI の活用では、単語入力へ自然に移行するなど生徒の習熟を確認できました。AI を活用することで、表現を楽しむ子が増えるといいなと思いますし、鑑賞の合間に使うことで思考の行き来もしやすいでしょう。作品の見方を広げる新しい方法として受け入れたいと考えています。



協力者：佐々木倫生先生（岩手県立美術館）

鑑賞の際はただ作品を見るだけでなく、途中で作品に関する情報を提供すべきだという考え方があります。学校教育での鑑賞では評価が必要となることも踏まえ、造形的な視点、作者の情報、時代背景などを伝えていくことが重要です。そのため、今回の授業では美術館で作成した解説文を活用しながら実践してもらいました。また、対話による鑑賞の中では、生徒が使う「エモい」といった現代的な言葉も大切にしたいと考えています。言葉を制限するのではなく、「なぜそう見えるのか」と問いかけることで、より深い鑑賞へと導くことができます。



美術館との連携について

作品を見るポイントにフォーカスした鑑賞

岩手県立美術館所蔵の作品画像は、当美術館のウェブサイトで作家と作品名を検索すればすぐに見ることができます。その画像をタブレット端末で拡大すると、筆跡や絵の具の盛り上がり、擦れまで観察でき、平面に見えた作品が実は立体的であることに生徒はとても驚きます。この利点を生かし、山村先生と指導案を検討する際、作品を漠然と見るのではなく、見る視点を身につけさせることにフォーカスしました。人物作品であれば、「その人物の視線の先」や「作品の中の注目ポイント」を意識させることで対話が広がると考えたからです。

本授業では、ファシリテーターとして山村先生が「何が見える？」「どこからそう思う？」と問いかけながら、人物や服装、背景の描き方について多くの意見を引き出しました。その後、萬鉄五郎の「赤い目の自画像」が描かれた時代背景を山村先生が解説し、「赤い目」にフォーカスした対話を展開しました。タブレット画面を拡大縮小しながら、目線や目の動きに注目し、さらに眉間のしわや頬の筋肉なども併せて観察することで鑑賞が深まりました。授業後、ある生徒は「絵を見るときは、さまざまな視点から見ると、自分が思っていた以上に発見があることがわかりました。これから他の作品を見るときも意識したい」

と述べました。多角的に見ることと、一点にフォーカスして見ることが身につけてきた姿です。

このような実践を通して、作品の見方を広げ、自ら視点を見出す自立した鑑賞者を育てることができます。学校と美術館での連携した授業を行うことで、自分の住む県の代表的な作家や作品について語れるようになってほしいと思います。そのために、郷土の作品の鑑賞を積極的に支援していきたいと考えています。

佐々木倫生（岩手県立美術館）



作品をモニターに映し、クラス全体で対話による鑑賞を行った。岩手県立美術館のウェブサイトでは、萬の作品だけでも800点以上を閲覧できる。



光村図書

教授用資料

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q

